
虚飾虚栄者は独よがりのうつけ者と契約しました

天馬 龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚飾虚栄者は独よがりのうつつけ者と契約しました

【Nコード】

N3035Z

【作者名】

天馬 龍星

【あらすじ】

二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、東京は日本から隔絶された。墮ち神を閉じ込めるために萌え文化が栄え、統一教会東京大学が創立された。東京は七区に分け割れた。

狭間区第一高等学校に通う、高校三年生の天海翼は自己中心的で人の話をまったく聞かない上に、いつも傍若無人な物言いで相手を困らせている問題児で、オタクで幼女好きで魔法少女を愛している、救いようのない変態だ。そして火竜焔は法律で禁止された科学

を扱うマッドサイエンティストで天海翼と同じくらい危険な存在だ。一二月二四日、天海翼は秋葉原に姿を現し、一人の少女と出会ってしまった。その出会いは必然だったのかもしない。彼女の出会いが天海翼の運命を大きく変えることになる。彼女は兵器で名をスピカといい、男性の血液を摂取することで、いかなるものでも創造することができる。しかも、最近この東京で流行っている萌えアニメ、魔法少女シリアに瓜二つで、さらに魔女が現れ、襲い掛かってくる。血の契約を交わすことで、エロゲーを剣に変える力を手に入れ、撃退するが、巡回中のお巡りさんに捕まってしまう。罪名 幼女誘拐および強制わいせつで拘置所に送られることになった翼は、組織の一員になることを決意する。教会でスピカと再会した翼は、組織から依頼を受け。秋葉原に調査に行くことになる。焰も翼と同じように契約を結び、特殊な力を手に入れていた。スピカの力を借りることで、焰達を追い詰めていくが……スピカはカオスへと姿を変えてゆき、翼に襲い掛かってくる。スピカを護れなかったことを悔んでいる時に、白山が現れ、翼にエロゲーを渡され、それを剣に変えることで焰を追い詰めるが、止めを刺すことはできなかった。悩んでいるうちに状況は悪化していき。最終的にはカサンドラが止めを刺すことになる。そこに死んだはずの父一心とアイリスが現れ、焰達を連れていてしまう。残された翼はカサンドラからイヴのこと聞かされる。イヴとは翼が幼い頃に出会った、初恋の女性で、始まりの書を託してくれ人でずつと捜していた人物だ。カサンドラと別れた後、またアイリスが現れ、見せたいものがあるというのついていくと、スイセンを見せられた。夢を見た翼は、思い出の少女イヴを具現化させてしまう。シスターカレハから……イヴ誕生の真実を知り、強くなるために次の任務へと向かうのであった。

第1話（前書き）

とてもおバカな内容になっております。

おバかなものが腹立たしい方はお読みにならぬ方が賢明です。

おバカを愛でられる心の広い方だけお読みください。

第1話

白いベッド上座りながら、窓の外を眺めている黒髪のサラサラロングヘアの女性は、ピンク患者衣姿でいる。壁は白く清潔感があり、たぶんここは病室だろう。ベッドの横に椅子を置いて座ったいる紺色のスーツをびしっと着た男性は、お見舞いに来た人だろう。随分と心配そうな顔をしながら、顎髭をなでている。

「あの鳥は、どこへ向かって飛んでいくのかしら？」

「俺達の手届かない、ずっとずっと遠くまでだろう」

「そうよね、空が続く限り、どこまでも……飛んでいけるわよね。」

もし、翼があれば　あの子を助けられたかもしれない。あの子の気持ちを少しはわかってあげられたかもしれない。でも、わたしにはどうすることもできなかった。だからこれは　罰ね」

「なぜ、キミが罰を受ける必要がある。この世界に、神なんてものが存在することじたいが間違っているだ。終わりをもたらす神なんて俺達は望んでいなかった。ただみんなが幸せに暮らせる世界を作るために　なんで……どうしてこうなってしまったんだ」

「お願い、彼女責めないで………一番悲しんでいるのは彼女だと思うから。鳥籠の中に閉じこめられた鳥でも、翼があれば大空を夢見ることができると　彼女もう、翼がないから　二度

と飛ぶことはできないの？　彼女は必死助けを求めている。彼女の悲しみ、苦しみが歪を生み、世界をどんどん歪めていく　このままではとりかえしのつかないことになるわ。だから　」

「ああ、求めるものが形あるものとは、限らない。未来とか希望でもいいだ。曖昧で不確かで不完全なものかもしれない。だからってお前を一人を死なせるわけにはいかない」

「ああ、気持ち良い風……もし私が鳥だったら、間違はなく大空を自由に飛べ回っているわね。そうだ！　この子の名前は、翼にしよ
うと思います、意味は可能性。あの鳥の自由に生きてほしいから。」

わたしみたいに何にも縛られてほしくないの。そして最後まで自分の意志を貫いて欲しいんです。あなたはそれでいいですか」

「ああ、俺も気に入った。だからあまり無理に力を使うな。俺が必ず運命を変えてやる。この子のためにもな。それに生きてさえいれば、大抵のことはどうにかなるものだ」

「やっぱり、あなたは優しいわ。でもこれは私にしかできないことだから……もう少しだけ、無理をさせてお願い」

「わかったよ、どうせ止めても聞かないんだろう。なら、好きにすればいいさ」

「ありがとう。もし私が死ぬことになっても、私が見たことは誰にも話さないでください」

「わかった、誰にも言わない。だけど忘れるわけじゃない。大丈夫、俺とお前の子だ！ どんな過酷な未来が待っていようと決して負けないさ、乗り越えて行ける強さを持っているはずだ」

第2話

またこの夢か？ 最近よく見るようになった不思議な夢。校長の話しがつまらなくて眠ってしまったようだ。椅子から立ち上がり伸びしてから、出口に向かって歩いてみると

「昨日の魔法少女シリアみたか？」

「見た見た、今回も萌え萌えな展開で、ドキドキしたぜ」

黒髪のひよろい男が、眼鏡をかけたオタクぽい男性に声をかける。オタクぽい男性は満面の笑みを浮かべて楽しそうに答えている。二人とも紺のブレザーを着たこの生徒で、興味深い話し声が聞こえてきたので足を止めて耳を傾けてしまう。

「蒼髪にロングヘアとか、最高に萌えるよな」

「ああ、あの風で髪が靡く所がチャームングだよな。あのネコみたいに大きい眼と愛らしい声も萌えちゃうよ」

「なかなか、お前わかってるじゃないか？ ミニスカ、黒ニーソがまた痺れるんだよな」

「そうそう、あの絶対領域は堪らんな。しかもあの上品そうな白いブーツの破壊力は萌え死ぬほどだ」

「その気持ちわかるぜ。やっぱりお前とは気が合いそうだな」

彼らが話しているは今話題の萌えアニメである。ここ東京では絶大な人気を誇っており、数多くのグッズ発売されている。

また、いたるところでポスターや看板を目にする。シリアグッズ専門店やシリア喫茶まで、できる始末だ。俺っちの名前はてんかいっぱい天海翼、

魔法少女シリアの大ファンにして筋金入りの二次元信者。リアルな女などに興味はない。シリアちゃん一筋で生きてきている。その熱の入れようは世界一だと自負している。萌え都市として栄えている東京すら、俺の居場所は無く異端視されるほどの完全無欠自己中オタクなのだ。

ロリコン幼女好き、変態などと罵倒されるわ。女子からの人気

なく軽蔑の視線が向けられ、男子もウザイ、キモイとか言われる始末だ。

二人の会話はヒートアップしていて、思わず声を発してしまった。後ろから二人の間に割り込む感じで思い切り叫んでしまった。

「貧乳って最高だよな、何か禁断の果実みたいで。特に幼女は素晴らしいよ」

「なんだ、コイツは俺達の会話に勝手に入ってきてきやがって。なんて空気の読めない、自己中な男だ、信じられん」

いらだった顔つきのひよろい男が、腹部めがけて大振りなパンチが飛んでくる。完全に頭にきていているようだ。目が血ばしているが、ひるむことなくその拳をかわし、蹴りをくりだす。腹を五センチほどめりこませ、くの字がったになって腹を抱えて、顔を歪めながらその場に倒れ込んだ。

「この傍若無人態度に、よれよれのダイサイ制服。ミスターヘータ
イーーーー」

無言で思い切り殴りつけ、空中を三回転くらし壁にぶつかり倒れたのを確認して、辺りに睨みを効かせ黙らせている途中で視界が暗くなり、力が入らずその場に倒れた。一瞬何が起こったのか、わからなかったが。

「おい、やり過ぎだよボケ。死人がでるだろう、少しは手加減しろよな」

この一言を聞いてすぐに何をされたのか、わかった。

「貴様、また変な薬をうちやがったな。このマッドサイエンティストめ」

「人聞きの悪いこと言うな、ただの興奮を抑える薬で人体に害はないはずだ」

（絶対ウソだ、コイツがそんな普通そんな薬を作るわけがない。俺たちは騙されぞ）

マッドサイエンティストの登場で周囲のざわめきが大きくなる、みんな彼を恐れているのだ。萌えて栄えている場所に住みながらの

萌え嫌いと言うか、オタク嫌いのイカレタ男を打ち破るように誰かが叫び出した。

沈黙の空気

「白衣を靡かせているあのイケメンは、火竜焰かりゅうほむら。この錬金術の時代でもなお科学を貫き通す姿勢を変えない、もう一人の異端児」
二〇一八年、科学万能の時代は終わりを告げる。相次ぐ環境問題さらされ、その被害は甚大しんたいで、日本の国民、いや、全世界において疲弊しきっていた。

しかし科学者達は解決策も講じることができなかつたのに対し、教会の対応は迅速かつ完璧なものだった。国民の支持された教会は実権を握り、信仰学の義務化と環境に悪影響を及ぼす科学技術の廃止を推し進め。それらが法律として認められ、全日本国民適応されて全国の学校では信仰学の義務教育が行なわれるようになった。科学が異端の学問になり、いつしか、マッドサイエンティストと呼ばれるようになった。科学者たちは、信仰学者と名前を変えることを余儀なくされた。

信仰学とはアルネシア神を信仰し、神の力の使い方を学ぶものである。

日本国民よって、信仰学は細分化され、次々新しい分野が開拓され、日常生活に溶け込んでいた。そして東京に浸透した信仰学は、萌えという感情を信仰する学問と好奇心を信仰する学問に別れた。

「よくもやりやがったな。貴様こそ俺っちを殺し気か、変な薬をうちやがって」

薬の効果も切れ、立ち上がると同時に啖呵たんかをきる。

「なんだやる気か。いいぜ、お前との因縁もそろそろわらせたいと思っっていたんだよ」

「ヤ、ヤバイ！ 奴等またここで死闘を繰り広げるつもりだ。逃げるぞ、巻き込まれたらそれこそ死ぬ。俺は逃げるからな、お前らも早く逃げたほうがいいぞ」

そう叫びながら、腹を抱えてひよろい男は体育館から姿を消した。もう一人男は倒れたまま動こうとしない。そして焰に殴りかかろう

としたら、担任の樋口ひぐちが割って入ってきた。誰かが先生を呼びに行つたのだらう、全く余計なことをしゃがって。

「また、お前たちか。毎日毎日問題を起しおって、馬鹿者どもが。冬休み返上で学校に来い。その腐った性根を叩き直してやる」

「待ってください、先生。俺達はケンカなんかしていません。終業式も終わったし教室にカバン取りに行こうぜ、と声をかけただけです、なあ、つばさ」

「親友とケンカするわけじゃないですか。ボク達はカバンを取りに教室に戻るので失礼します」

「おい、待って話しはまだ終わってないぞ」

樋口が何かを叫んでいるようだが、気にしない。体育館にたくさん生徒が残っており、みんな楽しそうに友達と話している。所々で小競り合いを起こしているのです、その対応に追われているため簡単に体育館を抜け出すことができた。

(どうやら、俺たちはコミュニケーション能力がゼロらしい。よく話しかけても無視されるし、さっきみたいにうまく会話の中に入ることができない。だから話し相手はいつも焔だけになってしまう。本当はみんなと仲良く話さないのに)

教室前の廊下一面に貼られた萌えポスターを見て俺たちは、東京が萌えに侵食されていることを実感した。

二〇二三年(当時五歳)、奴等は何の前触れも無く現れ、分身とも言える神を結晶化させ喰らっていった。神を喰われた者は、心を無くし奴等に隷属した。

父も俺たちも神を信じてなかったから、結晶化されることなく助かった。

神を信じてない人マッドサイエンティストが集まり、教会に反旗を起こした。

理由は至ってシンプルである、教会の生み出した神が災いの種だからである。

暴動が起きるなか父は教会から仕事を受け、奴等の正体を暴くために戦って死んだ。

父の死をいたんだ、多くの科学者が無念を晴らすために立ちあがってくれた。

そして個体数をだいぶ減らした奴等は人間に擬態し、人間社会にまぎれこんでいった。

しかし父は無駄死にしたわけじゃなかった、優秀な科学者達のおかげで、彼らが百分と萌えエネルギーで出来ていることと、萌えエネルギーに引き寄せられていることがわかった。教会は堕ち萌え神という命名し、一箇所に集めるために東京全土を萌え都市に作り変え、萌え神だけを信仰することを約束した。

さらに万全を期すため東京を出る者を無差別に殺す機械を設置して完全に隔離した。

「つばさ、そんな所に突っ立ってないで！ 早く来い」

廊下にまで響く焰の音が聞こえて、急ぎ足で教室の中に入ると、窓際の方で制服の上に白衣を纏って気取った男が目に入った。他に生徒はいないようだ。自分の机に向かってカバンを取ろうとしたら、唐突に話し掛けてきたので振り向いた。

「ちょっと相談したいことがある。人前じゃ言えない話なんだけど聞いてくれるか？」

「お前が俺つちに相談するなんて珍しいな、いつも偉そうなのに。で、どんな相談なんだ」

「教会の奴らに、堕ち神対策技術者としての誘いを受けた。近々堕ち神を根絶やし作戦が行なわれるため優秀な技術者を探しているらしい」

「確かにそれは人前で言える話じゃないな？ そんな重要なことを何故、俺つちに話した。しかも教会って？ 統一宗教ことか」

「ああ、そうだ。そこで巫女をやっているイヴという少女について知りたい。」

あとこれはチャンスだ、奴等を根絶やしにできる上に、心を無くした人達を救う方法がわかるかもしれない。なんせ教会の技術力は世界一だからな」

この世界には人の数だけ神が存在している。九十一年前の宗教統一戦争で、パンドラという女性が神を顕現させ、戦争を終わらせたと授業で習った。

今もイヴという巫女が新しい生命が誕生たびに神を顕現させているが

俺達には、神を顕現されていない、信仰心がないからだ。信じる気持ちが無ければ神は顕現されないみたいだ。それが異端視されるもう一つの理由だ。

また、願いを叶える時のみ姿を現し、普段は身体の奥深くで眠っているらしい。

人が死ぬと神も一緒に消滅するが一般的だが、神を喰らう神、堕ちた神というもの存在する。イヴが堕ち神を創りだしているという噂もあつたが、教会は全面的に否定している。

なぜ、萌えという感情が堕ち神になりやすいのか、それは謎の多い感情だからだと教会の科学者は説明していて、イヴが関与していることは認めていない。

焰の両親は神に心を喰われ、奴等のしもべになった。

もし助ける方法があるなら、俺たちも協力したい。堕ち神だけでなく、神の存在自体を恨みながら生きてきた、それこそ、全ての神を殺したいぐらいに怨んでいる。だから焰の気持ちはわかるつもりだ。だが、教会の手は借りたくない。しかし、その技術には興味がある。「それを知ってどうするつもりだ。まさか教会に手を貸すつもりか？」

「はあ、なわけねえだろう。俺が宗教に力を貸すことなどありえない。潜入だよ、潜入。敵のアジトに潜り込み中から破壊工作をする。少し考えればわかるだろう」

子供を諭すように喋り出す、そのふてぶてしい態度がむかつきつつ、納得の笑みを浮かべて、頭を掻きながら情報を整理し、必要最低限のことだけを述べるように努める。

「わかった」

「わかったならとつと教える」

焰はとても険しい顔をで注射器を向けつて、全身から教えなかったら殺す的なアレを出して脅おどしてくる。とても人にものを頼む態度じゃない、生唾を飲み込みながら、はきはきと喋りだす。

「知っていることを話そう、イヴの伝説は知っているよな。そのイヴの遺伝子を元に創られたパンドラだ。パンドラ遺体の側で見つかったのがイヴだ。なぜイヴと呼ばれているかという神を顕現させ、全て神を従えることができるからだ」

「一体どういうことだ、なぜ従える力も持っている。パンドラ以上のことができるというのか？ ちゃんと質問に答える」

注射器をしまい、襟元を掴んで詰め寄ってくる。慌てて答えるが今度は嫌味な感じで叫ぶ。コイツの態度にむかついてきたからだ。

「統一戦争後、パンドラは始まりの書を所持したまま姿をくらました。そしてイヴという少女が保護され、パンドラの遺体が見つかったのが十三年前。墮ち神が現れた時期と重なる。詳しいことは教会の人間に訊かないとわからないけど。イヴは魔法術師で、パンドラが、自分の遺伝子を改良して生み出した者だから、全て神を支配することができる」

「その話が本当なら、イヴが墮ち神を創ったということになる。なぜ、そんなことをした。まさか教会を潰すためか？」

「ああ、そうだろう。魔法術師とは、本来秩序を破壊する存在だからな」

「魔法術師ね。まだ、そんなこと考えていたのか？ まあてめえらしいか、でも俺は魔法術みたいなオカルト系は信じない。墮ち神の原因は科学的に調べるさ。」

でも、気になるなパンドラが教会を抜け出して遺体が見つかるまでの七十八年間の空白があるのか。

教会の教えを素直に信じるのは危険だ。パンドラという女の素性がわかっていない」

どこか納得したような顔をして、襟元から手を離し、びしっとか

つこつけて叫んできたのを聞いて、同類だと思った。

「お前こそ、いつまで科学にこだわるきだよ。今は神を信仰する時代だぜ。お前も変わらないじゃないか、俺っちは科学よりも魔法術を信じているだよ」

「そうかもしれないな。俺は科学一筋でてめえは魔法術の道を究めればいい。もう同じ道は歩けないのだから」

「俺とお前じゃ、目指すものが全然違うからな。道を違え、今は敵同士だが、いつか分かり合える、友達になれると思っっている」

「そんなことはありえない、もつと現実を見るよ。昔とは違うんだよ。萌えオタは大嫌いだ、俺は俺のことしか信じない。もう裏切られるはたくさんなんだ」

「まさか、黙って引越しちゃったことを怒っているのか、なら誤解だ。お前を裏切ったわけじゃない。仕方ないことだったんだ、信じてくれ」

「信じる、何を信じるというのだ。何も知らないくせに調子のいいことばかり、てめえを見ていると虫唾が走る。俺がどれだけ苦労して特待生なったかも知らないのに、偉そうにほざいてんじゃねえ」

「まあ俺達は、学校だけの関係で、立ち入った話しはしたことがないからな」

「学校以外の時間は全部研究に費やしている、馴れ合いは嫌いなんだ。それにオタ活動なってキモイことはやらない、萌えオタなんてみんな死んでしまえばいいだ」

「だから教会の誘いを受けるつもりなのか？ 萌えオタを全滅させるために」

「ああ、そうだよ。俺は萌えオタが大嫌いなんだよ、見てるだけで吐き気がしてくる」

「お前のオタ嫌いは異常だ！ 俺が居ないあいだに、何がお前を変えたんだ、焰」

「てめえこそ、なぜオタをやっている。オタクがそんなに偉いか？

俺に指図できるほど」

「俺っちはただお前が心配なだけなんだ。幼い頃に命を救われたからな」

「俺の心配をする前に、自分の心配をしろよ。教会の大学に進学するんだて、でもてめえの学力じゃ、逆立ちしても無理だぜ。学年最下位のクズが」

「やってみなきゃわからないじゃないか？俺っちの夢はやっぱりあの少女と再会すること。それを叶えるためには、大学での勉強は必須なんだよ、わかるか」

「すまん、全然理解できない。なんで名前も知らない少女のためにそこまでできる。」

しかも、てめを裏切って捨てた女なんだろう。なぜ捜すんだ、復讐するためか」

「お前には一生わからないさ、彼女の気持ちなど。紙には助けてではなく、さようならと書かれていた。つまり自分から姿を消したんだ、俺っちを巻き込まないために、そう彼女は優しい子なんだよ。そんな彼女の側にいたいから俺っちは捜すんだ」

「まさか……本気で言っているのか？恋をしたというのか？名も知らない少女に。理解不能な感情だぜ」

「だから言っただろう、お前には一生理解できないことだと。このマッドサイエンティストめ」

「俺はいいだよ。マッドサイエンティストと呼ばれても、何かカッコいいじゃん。でもてめえは違うだろう。夢ばかり見て現実と夢の区別もつかなくなった。救いようのないバカだろう」

「ちゃんと、現実と夢の区別くらいつけられる」

「てめえが出会ったという魔法術師も、どうせ妄想の産物だろう。現実を見ていない証拠だよ」

「あの子は確かに居たんだ、俺っちはしっかり覚えている。アレは、夢でも幻でも妄想でも無い。現実のできごとなんだ」

「だったそれを証明して見せろ、口だけなら何とでも言える。俺の前にその魔法術師を連れて来い。まあ、所詮無理な話だ、諦めて自

分の愚かさを認める。ふっははは」

「笑うんじゃない。あの子と再会するため俺たちは大学に行く決めてんだ」

コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないだ。信仰心によって生み出された神は、人の心を喰らい願いを叶える異質な存在。願いを叶えることに人形になっていき、最後にはイヴに隷属する。そして焔の両親は願ってしまった。死んだ我が子を生き返らせて欲しいと、その代償に心を失った。焔は未熟児だったらしく、生まれて十日ほどで死んでしまった。だからどんな代償を払っても生き返らせたいという思いがあつたのかもしれない。

神の力は平等ではない、高位の神がいれば、低位の神もいる。

高位の神を宿した人間だったならば結果が変わっていたのかもしれない。

そんな理不尽な理由で納得ができるわけがなく、俺達は教会を憎むようになったのかもしれない。

今は寮で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。

だからコイツは神を信じない、けれど学年一位を常にキープしているから凄い。

トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。

いくら技術が発達して生活が楽になると宗教は無くならないのだから

「そこまで言い張るなら俺と賭けをしないか？俺が勝ったら、助手になつてもらおう。てめえは馬鹿だが、手先は器用だし機械に強いからそこそそ役に立つ」

「ああ、いいだろう。俺たちが勝ったら魔法術の研究協力と大学への手まわしを頼みたい」

「ふっ！いいぜ。勝負内容はアキバで行なわれているという萌え萌え美少女だらけのコスプレバトルの調査だ。期限は新学期までだ」

「それって今ネットで話題の魔法バトルネタか？アキバでアニメ

のコスプレした、美少女達が世界の命運をかけて戦っているというアレか？ 確か魔法少女シリアちゃんのコスプレをした参加者もいるという。超々俺っち好みのネタじゃないか？ その真偽を確かめてくればいいんだな」

「ああ、調査方法はてめえに任せる。だが忘れるな、俺に下手な小細工は通用しないぞ。ふっははは」

コイツは何も変わっていない、兎相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺っちが困っている時は助けてくれたし、今だって将来のことを真剣に考えてくれている。たぶん……萌え萌え美少女だらけのコスプレバトル調査というのも、俺っちを諦めさせるためのものなんだろう？ 情報元不明の怪しいものだ。調査には一週間も掛からないだろう。それ目で真相を確かめ、魔法術などはないということを確認したいのだろう。ほんと愚直な奴だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3035z/>

虚飾虚栄者は独よがりのうつけ者と契約しました

2011年12月10日20時50分発行